

インターネットの問題に自ら対応する力の向上を図る情報モラルの指導（第二年次）

—学校と家庭をつなぐ、道徳及び特別活動における指導を通して—

長期研究員 笹川 光 威

《研究の要旨》

総務省作成の情報モラルに関する指標を活用し、生徒の実態・変容を客観的に把握するとともに、実践意欲を醸成する道徳、実践力を高める学級活動など、領域間の連携の工夫を行った。また、保護者との連携強化のため、授業内容を共有し、新たな問題に対応するための情報提供など、家庭との連携を図った効果的な情報モラル教育の実践の効果を検証した。

I 研究の趣旨

「第9回青少年と保護者のスマートフォンやネットの利用における意識調査」(デジタルアーツ株式会社 平成27年2月発表)によると、中学生の8割が何らかの形でインターネットを利用しており、被害も増加傾向にある。さらに、被害の低年齢化も進んでおり、情報モラルの指導の重要性は高まるばかりである。

一方、本教育センター情報教育チームが実施した、「福島県の情報教育の実態等に関する調査」(以下、「情報教育の実態調査」)によると、本県中学校において、情報モラルを指導した教科等は、技術・家庭科の技術分野が9割、学年・全校集会在が6割、総合的な学習の時間が4割で、指導した総時数は1～4時間が7割であった。限られた指導時間を効果的に活用し、さらに、教科・領域の特性を踏まえ、生徒の実態に即した指導が求められる。

また、先述の「情報教育の実態調査」において、スマートフォン等の指導に関して保護者と連携する機会は、保護者会が8割、文書配布が6割、講習会等が4割であった。学校と保護者の連携という部分では対応が図られているが、生徒を中心とした、学校、保護者の三者による情報の共有は十分であるとは言えない。生徒の情報モラルの育成においては、保護者の協力や理解が不可欠であり、学校と保護者が共通認識に立って生徒の情報モラル教育を推進していくため、学校と家庭をつなぐ手だてを講じる必要がある。以上のことから、本研究主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

情報モラルの指導において、以下の三つの視点に基づいた指導を行えば、インターネットに関する様々な問題に自ら対応する力の向上が図られるであろう。

【視点1】 I L A S^{*1}を活用した生徒の実態分析と、変容の把握

【視点2】 教科・領域の特長を生かした、横断的な情

報モラル指導

【視点3】 保護者、学校が共に進める、つながり、広がりのある情報モラル指導

※1 総務省が、インターネット上のリスクに対応するために、すべての青少年の習得が望まれる能力を明らかにした七つの指標。

2 研究の内容

(1) 【視点1】について

自校生徒の情報リテラシーに関する実態分析を、I L A Sテスト^{*2}にて行う。また、保護者の実態分析を、内閣府が実施している、「青少年のインターネット利用環境実態調査」(以下、「利用実態調査」)の保護者調査票、問5から七つ(I L A Sと同様の項目)を抽出して行う。

※2 安心ネットづくり促進協議会が、I L A Sの定義をもとにして開発した、小学生から大人まで短時間で実施ができるテスト及び解説集。

(2) 【視点2】について

各授業において、教えるべき内容を知識としてインプットし、獲得した知識を基に自己の行動を選択させ、記述や発表といったアウトプットをさせることを授業の基本型とする。

指導する領域を、主に、道徳(道徳的な判断力から実践意欲を高めることを主とする授業)、特別活動(自主的・実践的な個人の現状にあった行動選択をさせることを主とする授業)の二つとし、一つの情報モラル課題について、それぞれの教科・領域の特性を生かし系統的な指導を行う。

(3) 【視点3】について

保護者と共に進める情報モラル教育をめざし、保護者に対する働きかけと、情報提供を行うため、各授業において生徒が学習内容を記入したワークシートを家庭に持ち帰らせ、保護者と情報モラルについて確認させる。さらに、保護者の思いや考えを記入してもらい回収して以降の指導資料とする。情報モラルについて学校で指導できること、家庭でしか指導・実践できないことを明確にし、学校と保護者が連携して指導できる体制を整備する。

3 研究の実際

(1) 道徳・特別活動の授業の実際

① 道徳の時間【セキュリティ】(第2学年実施)

内容項目	A 自主, 自立, 自由と責任 C 社会参画, 公共の精神
インプット	授業導入時の自己の考えの認知
アウトプット	授業終末時の新たな自己の考えの記述

授業導入時に、各個人が守りたい情報は何かを焦点化させ、学級全体で発表させることで、各個人によって守りたい情報には違いがあることを認識させた。次に、個人で守りたいと思う理由を基に、班での討論を行った。その際、補助発問により自分、家族、企業、プロバイダ等の視点から多面的・多角的に考えさせた。また、自分以外の視点で考えることが難しいと予想されたため、文部科学省「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」より、映像資料を視聴させ考えさせた。

授業終末で、再度、個人で守りたい情報と、その理由を考えさせ記述させた。その上で、セキュリティは個人だけの問題にとどまらないということを、個人から学級へと考えを集約する中で、変容を促した。生徒に選択させた中の一つである、スマートフォンのパスワードについて、守りたいと思う理由の変容を見ると、授業導入時は100%の生徒が「自分が困るから」と答えていたが、授業終末では、66.7%の生徒が「他人も困るから」となった(図1)。以上から、生徒は、守るべき理由を多面的に考え、道徳的心情から見つめ直し、自己の考えを再構成できたと考える。

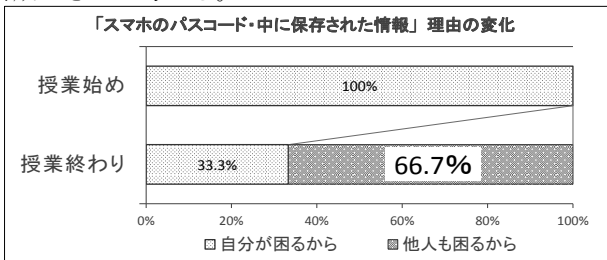


図1 道徳における生徒の考えの変容

② 学級活動【セキュリティ】(第1・2学年実施)

内容項目	(2) 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成
インプット	パスワード、画面ロック、アップデート、ウイルス対策、フィルタリング
アウトプット	今日から行いたい具体的なセキュリティ対策について話し合う。

授業導入時に、各個人のインターネットの利用環境と、実際に行っているセキュリティ対策について確認させた。機器の所持に関わらず、パスワードや画面ロックの重要性を学ばせるため、実際にパスワードの強度をチェックできるサイト※3を用い、使用しているパスワードの状況を確認させた。

※3 「KASPERSKY SECURE PASSWORD CHECK」

<https://password.kaspersky.com/jp/> (2016/12/16アクセス)
アップデートとウイルス対策については、人間の体になぞらえ、日頃の健康管理と予防接種に対応させ学ばせた。

フィルタリングについては、危険なサイト閲覧による被害の回避に有効なこと、18歳以下の使用者にはフィルタリングが義務付けられていることを学ばせた。アウトプットとして、個人の利用状況に応じて、すぐに取り入れたいセキュリティ対策を選択し記述させることで、インプットした知識を基にした行動選択を表出させた。

授業導入時、「現在行っているセキュリティ対策は何か」との質問に、「していない」「分からない」と回答していた約3割の生徒は、新たに獲得した知識を踏まえて行動選択を行うことができた。全体としては、新たに学んだ「ウイルス対策」「アップデート」を選択した生徒が大幅に増えた(図2)。生徒それぞれが、自己のインターネット利用状況に応じ、真に必要なを感じるセキュリティ対策について導入しようとする意欲が大幅に伸長した。

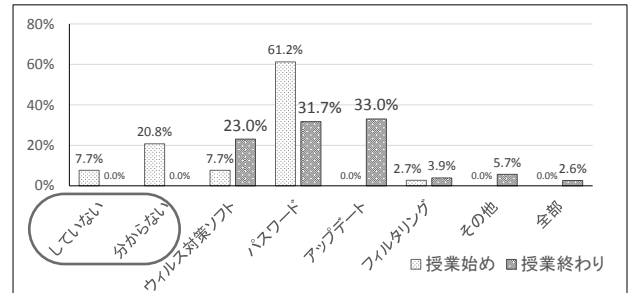


図2 学級活動における生徒の考えの変容

(2) 保護者に行った情報提供の実際

各授業で使用した生徒のワークシートの裏面に、家庭に協力をお願いしたい情報を掲載した(図3)。おおむね授業内容に関連した情報を選択し、特に重要なものは学年通信等にも掲載を依頼した。

確実なフィルタリングをするために

インターネット接続には、携帯電話回線経由と、Wi-Fi経由の2つがあります。どちらもフィルタリングされていることが重要です。

こちらはカバーされていることが多い

Wi-Fi (無線LAN)

自宅のWi-Fi経由や公共のWi-Fiスポット経由が盲点です。

ブラウザ型フィルタリングは導入されていますか?

iPhone, iPad, iPod (音楽プレーヤー)等は、さらに機器側の設定が必要です。

フィルタリングされたインターネット閲覧アプリ(ブラウザ)以外を入手できなくなる設定の必要があります。

機器側の設定を行い、子どもは変更できないようにしていますか?

フィルタリングがかかっていないアプリ、たとえばLINE等で送られてきた有害サイトのURLからの接続にはフィルタリングは機能しません。
ご家庭のルールや、子どもの道徳心が最後の壁となります。

図3 保護者への情報提供の例(フィルタリング)

III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) I L A Sテストを活用した生徒の実態分析と変容

実践前の5月と実践後の10月に実施した、ILASの変容から、「セキュリティ」の項目で生徒のリテラシーの伸長が見られた(図4)。情報モラルの授業を意図的・計画的に行うほど、生徒が自ら判断する基となる知識が定着し、各リテラシーが伸長することで、インターネットの問題に自ら対応する力の向上に効果をもたらすと考える。

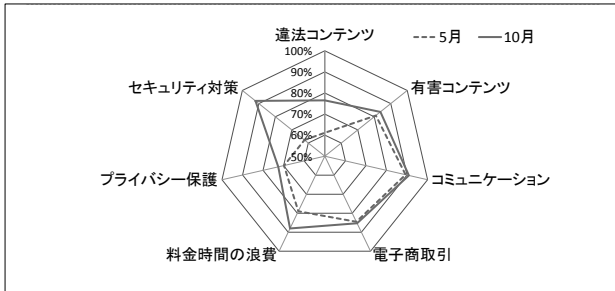


図4 第2学年生徒のILASの変容

(2) 道徳の時間と学級活動を連携させた指導の効果

道徳の時間と学級活動の領域間の連携を図り、セキュリティについて指導をした学年においては、ILASの「セキュリティ」に関する項目が29.8ポイントの増加と大幅な伸びを示した(図5)。特に、道徳の授業において、生徒に、道徳的心情から身近な事象への判断を促し、さらに、学級活動において、個人の実情にあった行動選択をさせることは、生徒の情報モラルの向上にとどまらず、問題に自ら対応する力を向上させる上で効果があったと思われる。

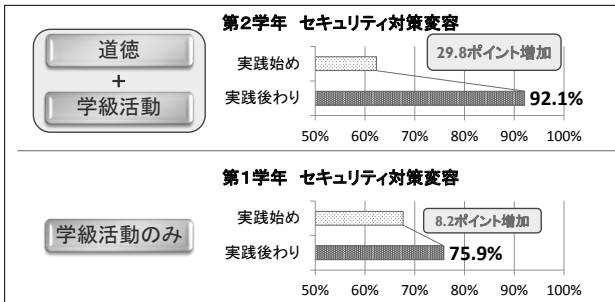


図5 ILAS「セキュリティ」項目の変容

(3) 授業ワークシートを介した保護者との連携の効果

保護者アンケートの結果の変容は、授業を行った項目を中心に数値が減少した(図6)。しかし、各授業後の保護者への質問の詳細な分析において、「情報提供された内容を知らなかった」「情報が役に立った」との回答が多いことから、保護者は、情報モラルについて言葉としては知っているが、内容や実際の対処法については具体的に知らないという傾向が読み取れた。したがって、保護者アンケートの数値の減少は、保護者の情報モラルについて知らなかったことへの気づきや、さらに詳しく知りたいといった、情報モラルに関する興味・関心の高まりと捉えることもできる。

以上のことから、家庭と連携を図る手だては、保護者の意識の変容を促し、家庭で情報モラルについて話し合う場を提供するとともに、生徒の情報モラルの向上に大きな効果を生むと考える。

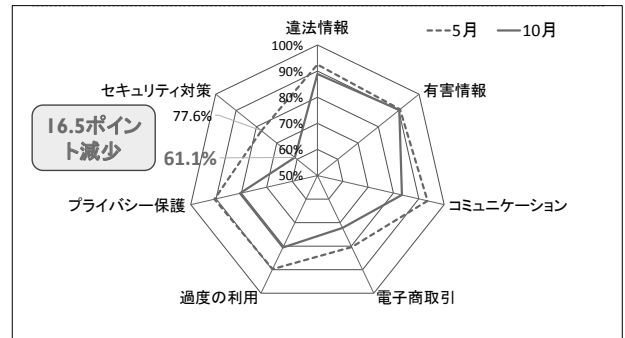


図6 保護者アンケート結果の変容

2 今後の課題

(1) 道徳における情報モラル指導

道徳で情報モラルを題材として取り扱う際、生徒は、インターネット利用の利害に焦点を当てがちで、他者の視点で多面的に考えさせることの難しさを感じた。生徒の深い思考を促すための発問を精選する必要がある。また、道徳の授業の終末で、扱った内容項目と類似のインターネットの事例を挙げるなどの展開も有効と考える。

(2) 必要な情報モラルに関する知識の定着

各学校において、情報モラル指導に充当できる時数には限りがあり、授業実践の間隔が空く傾向にあるため、生徒に行動選択をさせる場の確保や、授業における系統性の維持、知識の定着が課題として挙げられる。情報モラルについて教えるべき内容の系統的・横断的なカリキュラムマネジメントが重要になると考える。

(3) 特色ある学校教育の柱としたカリキュラム構成

生徒に、情報モラルにおける知識の有機的なつながりを持たせ、さらなるリテラシーの向上をめざすためには、総合的な学習の時間で、情報モラル教育を探究的な学習として取扱うことが効果的と考える(図7)。特に、情報モラル教育を現代社会における重要な課題として、人権教育、道徳教育、キャリア教育等と関連付けたカリキュラムを構成・展開していくことにより、生徒の自ら対応する力がさらに伸長すると考える。

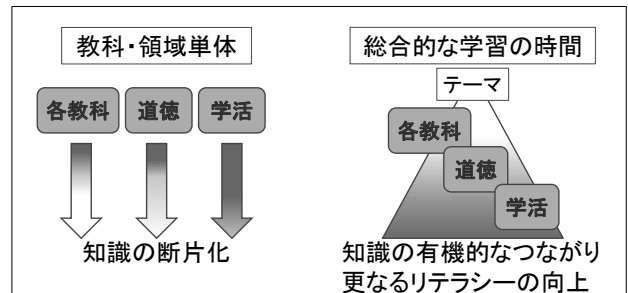


図7 総合的な学習の時間で取扱うイメージ